

冰青居藏品図録（古筆切編）

—— 私撰集（一） ——

池 尾 和 也

はじめに

本稿は、所蔵する国文学関係の資料の内から、紹介に足ると思われるものを選んで、図版として提供することを目的とするものである（本来の趣旨からは、最初に図版を示すべきであるが、便宜上、末尾に一括して掲げた）。表題の名称は、稿者の室号に因むものであるが、所蔵品は私個人のものであるというよりは、書家でもある配偶者との共同所有物でもあるので、単に架蔵とすることについての幾許かの躊躇いも存するので、このような仮称を付したものである。もとより研究材料としてというよりは、日本の文化としての書や書物に対する興味・関心を満たすための蒐集であり、古い珍しいもの、美しいものに対する所有欲（手元に置いて眺めたいという）による所蔵品と言ってよい。それでも中には長く死蔵すべきではない資料も少なからず存するので、機会をいたゞいてこゝに紹介するものである。蒐集自

体は多岐に亙るが、中でも中心を成すのが古筆切を含む手跡資料なので、先ずはそこから手を付けることとした。

今回はその内、中世期成立の私撰集を書写内容とする古筆切を選んで、若干数を紹介する。本来であれば、図版とその正確な書誌的情報を記せば充分であるが、私に拙い論考を付け加えさせていたゞいた。見及ばない資料や論考の見落とし、失考などもあるかと思われるので、広く批正を請う次第である。

1、伝世尊寺行尹筆四半切（新撰和歌六帖）

未装の断簡で、極札は付属せず、図版①に見るような小札（二・四×〇・九cm、やゝ青みがゝった料紙に金箔・金泥下絵）に「行尹」とある。料紙は楮紙、二一・五×九・二cm（字高一八・六cm）で、元は小振りな四半形の冊子本であつたと推定される。裏書等はない。和歌二行書、一面六行であるが、おそらく横幅が切断されて三分の二程度の寸法になっていると想定されるので、元は一面九行程度であつたと推測される。書写年代は鎌倉末く南北朝期頃。ツレは現在のところ管見に入っていない。世尊寺行尹の真筆とされる七社切とは別筆で、単なる伝称筆者にとゞまるが、年代的にはほぼ同時代の書写と見做される。やゝ粘りのある世尊寺流の書風から、行尹の名が充てられたのであろう。各種名葉集類の「行尹」条に、本切に該当する記載は認められない。

内容は、『新撰和歌六帖』の第五帖「ふせり」題の第四首から「あか月におく」題の第一首上句（一四〇九く一四一一上句）で、順に信実・光俊・家良の詠に当たる。『新撰和歌六帖』を書写内容とする古筆切は少なく、有名な伝藤原為家筆大原切の他、伝源頼政筆六半切が知られる程度であり、書写年代はそれらよりは下るものゝ、こゝにも一種を加えることにも、幾許かの意義はあるものと思われる。図版①に見るように、大原切に見られる各詠者の相互評価を示す合点は認められず、新編国歌大観所収本文との異同もない。

あなちにかたみに袖をかさねつゝ

あかぬよことはすきまたになし

をのつからたまくらはつしねなをれは

われおもはずといもむつけたり

あか月にをく

あかつきのゆふつけとりもつらからず

2、伝藤原家隆筆四半切他一葉（現存和歌六帖）

『現存和歌六帖』を書写内容とする切を二葉紹介する。

一つは軸装の一葉で、納められた桐箱（四七・六×七・五×五・七cm、上蓋高二・七cm）の上蓋には、

〔表〕 壬生二品家隆卿

〔裏〕

辛卯曆弥生

たちかへり

古筆

ほととぎすの 一表

了信〔花押〕

うた切

との箱書が記されており、古筆本家十三代了信が昭和二十六（1951）年三月に極めたものと知られる。極札も付属し、

「極」と表書きした包紙（楮紙、二五・九×三七・〇cm）に、二枚の極札が内包されており、一枚は「從二位家隆卿たちかへり〔守村（墨印）〕」（一〇・六×一・五cm）とあり、裏書・裏印等はなく、個性的な筆跡ではあるが、古筆分家の何代目のものかは特定できなかった。もう一枚は「從二位家隆卿〔佐（墨印）〕」（一〇・〇×一・五cm）とあり、裏書等はなく、これもその鑑定印等からは鑑定者の特定はできなかった。尚、箱内には他に良門から利基を経て隆祐に至る系図が書かれた紙片（筆者不明。楮紙、二八・三×六・〇cm）が納められている。おそらく了信は、これらの極めに基づいて「壬生二品家隆卿」と極めたものと推測されよう。各種名葉集類の「家隆」条に、本切に該当する記載は認められない。

表具は大和装（本紙台紙貼）で、一文字及び風帯は縹地に金で花大桐を箔押しした印金、中廻しは柳鼠地に金糸で牡丹の大模様を織り出した金欄、上下は煤竹色の無地の紗、軸先は角質の印可型（寸法等省略）で、大振りな紋様の寺家好みの仕立てとなっている。

本紙の料紙は斐紙、二二・七×一五・三cm（字高一八・六cm）で、元は四半形の冊子本であったと推定される。和歌二行書、一面十一行。ツレは現在のところ管見に入っていない。書写年代は鎌倉中期頃。祐海切などにも通う書風から家隆と極められたと想像されるが、もとより書写内容の『現存和歌六帖』は建長二一三〇年の成立であり、嘉禎三一三三七年四月九日に没した家隆の書写ではあり得ない。『現存和歌六帖』を書写内容とする古筆切は極めて少なく、散佚部分である第三帖を書写した部分が見つかっている伝二条為宗筆四半切（鎌倉末く南北朝期書写）があるくらいである。鎌倉中期とは言っても、おそらくは後期に近い時代の書写とはいえ、ほぼ原本に類する天理図書館本や、それに次ぐ冷泉家時雨亭文庫本に近接する書写年代を有する本切は資料的にも貴重であり、また今後出現するかも知れない散佚部分の切の認定にも寄与するものと思われる。

さて、本切の内容は、『現存和歌六帖』第六帖「ほととぎす」題の末尾（八二七〜八二九）に当たる部分であるが、⁽⁵⁾以前述べたように新編国歌大観所収本文の底本である呉文丙氏旧蔵本（天理図書館現蔵）の「ほととぎす」題歌と「ちどり」題歌の間には落丁が存する可能性が高く、新編国歌大観本では藤原忠兼歌とされる八三〇・八三一番歌が別の歌人の詠である可能性を指摘したが、この部分が正にそこに当たる訳である。天理図書館本では（作者名はすべて行間に小字書入、『國書遺芳』⁽⁶⁾所収本文では（113）で、一一二丁ウラ・一一三丁オモテに当たる）、

きけはうしきかねはこひしほととぎす

むかしの夏はいかゝなきけん

權大納言實雄

たちかへりなきふるせともほととぎす

なをあかなくにけふもくらしつ

法印良守

こゑふりてなれぬるのちもほととぎす

あかぬはなにのちきりなるらん

藤原為繼朝臣

なきふるすときこそありけれほととぎす

なにかうつきのそらにまちけん

藤原忠兼朝臣（一一二ウラ）

いはこゆるかはをとすめるあきのゝの
ふけゆく月にちとりなくなり
むれてゆくさほのかはらのむらちとり
しもよりほかのほとものこらす

衣笠前内大臣

やみ^まちかきさほのかはとのゆふきりに
ゆく^かともしらすなくちとりかな

權大納言忠信

やまかほのみかけにそよくあしのはの
さむきゆふへになく「ちとりかな

従二位行能（一一三オモテ）

となっており、新編国歌大観本文では、藤原忠兼歌のところに「ちどり」題が校訂・補入、二首目（八二七）初句「をちかへり」と校訂されており、本文と同筆で記された異同箇所はすべて傍書された訂正文本に従っている（「しもより」の「り」は、本文の「里」に「利」を傍書したものの）。

本切では、「藤原忠兼朝臣」の詠は「ちどり」題に直接せず（本切に紙継ぎなどは存しない）、図版②に見るように八三〇番歌とは別の和歌の上句（ほとゝぎす詠）が書かれている。即ち、「藤原忠兼朝臣」と「いはこゆる」に始まる「ちどり」題歌の間には、予想したように一丁程度の落丁が存したことが、本切によって証明されたことになろう。残

念ながら上句のみではあるが、『現存和歌六帖』に一首（半首）を加え、藤原忠兼の新出歌（現在のところ他出文献は確認できない）を得ることができた訳であり（対して八三〇・八三一は、やはり別人の詠と考えた方がよいことになる）、今後のツレの出現次第によつては、このような落丁部分（数カ所予想される）の補訂が進むことが期待される。

因みに、八二七番歌は前記のように新編国歌大観所収本文では初句「をちかへり」とあり、異同が存することになるが、底本である天理図書館本との間に異同はない（この校訂本文そのものは、同歌の第一次資料である宝治百首〔八九〇〕に従ったものと推測されるが、鎌倉期書写の天理本と本切がともに「たちかへり」とある点からは、現存和歌六帖の本文としてはこれを探るべきではなからうか）。

權大納言實雄

たちかへりなきふるせともほととぎす

なをあかなくにけふもくらしつ

法印良守

こゑふりてなれぬるのちもほととぎす

あかぬはなにのちきりなるらん

藤原爲繼朝臣

なきふるすときこそありけれほととぎす

なにかうつきのそらにまちけん

藤原忠兼朝臣

いくこゑもなをこそあかねほととぎす

もう一葉は未装の断簡で、極札は付属せず、ツレも確認できないので、現状では筆者未詳四半切と呼んでおく他ない(図版③)。切右下隅に「・リク常」と読める細字のペン書き様(拡大して見る限り、薄墨の細筆書きと見ておくべき)の書入があり、横長の楕円形とおぼしき割印(右半分)が存するが、現在のところ詳細は不明である。

料紙は斐紙、二三・六×一五・九cm(字高一九・一cm)で、元は四半形の冊子本と推定される。和歌二行書、一面十一行。鎌倉中々後期頃の書写。速筆でやゝ癖のある書体で書かれているので、博搜すれば同一筆跡の切などを見つけることができるかも知れない。ツレは現在のところ管見に入っていない。

書写内容は『現存和歌六帖』第六帖で、「すみれ」題の最終歌(二四二)から「わらび」題の第一首(二四四)までは新編国歌大観所収本文に一致するが、新編国歌大観では二四五番歌は「真観」詠で、本切に見える「中原師員朝臣」詠は存在しない(他出文献も現在のところ確認できない)。

天理図書館本では、実はこの部分も丁の変わり目に当たるが、他の落丁予想箇所とは違い、同一丁のオモテとウラという位置関係にあり、通常落丁の可能性は有り得ないので、前稿ではそのような予想は立てゝいなかった箇所である(『國書遺芳』所収本文では(34)左頁々(35)右頁で、三四丁のオモテ・ウラに当たる)。引用しておく(作者名はすべて行間に小字書入)。

藤原經平朝臣

すみれさくいはたのをのにしめさゝむ

ゆきゝの人のつまゝくもおし

をはき
前大納言為家

かすか野はをはきつみけりならやまの
このめはる風ゆるくふくらし

わらひ
正三位知家

けふの日はくるゝとやまのかきわらひ
あけは又こむおりすきぬまに」(三四オモテ)

真観

つゆかゝるをさゝましりのしたわらひ
さもおりふしはぬるゝそてかな

ゑく
正三位知家

ひはりあかるやまさはみつに袖ぬれて
ゑくのわかはをつむはたかこそ

ゆり
前摂政左大臣

いまはけに秋ちかゝらしさゆりはな
ゆりあふまてにをけるしらつゆ

衣笠前内大臣」(三四ウラ)

となる。稿者⁷は天理図書館本『現存和詞』を限りなく原本に近い（第一次成立の完本無記名本現存六帖の第六帖分に作者名を小字書入して、清書本の手控えとした）ものと考えるので、この現状からは、こゝに脱落のある可能性は極めて低いものと考えざるを得ない。であれば、本切の元となった冊子本の筆書者が親本からの書写の際に二枚めぐり等で真観詠を含む部分を脱落させてしまったのであろうか。しかし、上句だけとはいえ本切に存する中原師員朝臣詠は、現存する『現存和歌六帖』諸本には見出せない（抄出本も同様である）。

以上の状況からは、第一次奏上本の面影を残す天理図書館本『現存和詞』から最終的な奏上本に至る過程で、幾許かの増補（物故者となったものゝ詠は削除）を含む補訂が行われた可能性が浮かび上がる。即ち本切は、増補完成を見た完本系『現存和歌六帖』を書写したものゝ断簡であるという推論となる。本切の中原師員歌が確実に「わらび」を詠んだものであれば、このような推論にはかなりの蓋然性が与えられそうであるが、現状ではその可能性が極めて高いと言えない。しかしこの歌がどこからきたのか、整合性のある考えとしては有り得べきことではなからうか。

作者の「中原師員朝臣」は、直近の勅撰集である『続後撰和歌集』（建長三1251年冬成立）では「中原師員」（二〇六〇）とのみ表記され、「朝臣」は付されていない。同じく建長五〇六年成立の『雲葉和歌集』でも「中原師員」（五〇四）と表記されるのみである。師員は、元暦二1185年中原師茂の子として誕生するも、家系は明経道中原氏の傍流であり、本来であればそれ程の位階は望めなかったが、叔父藤原（中原から改姓）親実ととも鎌倉幕府に出仕し、藤原定員・藤原親実・後藤基綱などとともに四代將軍頼経の側近となったことにより栄進を果たし、仁治二1241年二月一日には従四位下に叙されている。寛元四1246年の宮騒動の折には、側近であったにもかゝらず罪に問われることなく、建長三1251年六月十五日に病により出家して任を辞するまで評定衆の座にとゞまっている（同月二十二日卒去）。「朝臣」号が現存〳〳現任のものに限定されるとでもいうならば、生前の撰集である『現存和歌六帖』と没後

の『続後撰集』『雲葉集』の表記の違いは納得されるが、爾後の勅撰集である『玉葉和歌集』（五三一・二〇〇三）・『続千載和歌集』（二九九・八三四・一八五二）では「中原師員朝臣」と表記されており、当然このような説明は通らない。理由はともあれ、こゝでは同時代表記としては珍しく「中原師員朝臣」が選択されている訳である。

伝家隆筆切と同じく、本切も思わぬ問題を含んだものであった。鎌倉期の書写ということも含めて、『現存和歌六帖』の成立に貴重な示唆を与える断簡であり、今後のツレの出現が期待される。「中原師員朝臣」以下を除いて、新編国歌大観所収本文との異同はない（書入及び押印は省略）。

藤原経平朝臣

すみれさくいはたのおのにしめさゝん

ゆきゝの人のつまゝくもおし

おはき
前大納言為家

かすかのはおはきつみけりならやまの

このめはるかせゆるくふくらし

わらひ
正三位知家

けふのひはくるゝとやまのかきわらひ

あけはまたこんおりすきぬまに

中原師員朝臣

たれしめてやくともみえぬやまかけに

3、伝世尊寺行俊（覚源）筆四半切（雲葉和歌集）

未装の断簡で、極札（斐紙・紫内曇り、一一・一×一・九cm）には「行俊」とのみあり、裏面には鉛筆書きで「よみ人しらす／神さふる」と記されているが、鑑定者は不明（裏面の記載は、極札がこの切に付属するものであることを示す、所有者の忘備のための覚え書きであろう）。図版④を見て分かるように、本切は通常、伝称筆者を「覚源」とする『雲葉和歌集』を書写内容とする四半切である（真筆かどうかは不明）。

料紙は良質の斐紙、二三・九×一五・七cm（字高一九・〇cm）で、元は四半形の冊子本と推定される。和歌二行書、一面十一行で、図版に見るように詞書の下に充分なスペースがあるのに改行して作者名を記しており、かなり贅沢な書写態度が見てとれる。鎌倉中期によく見られるやゝ右肩上がりの熟れた後京極流風の（同流本来の縦への推進力をあまり感じさせなくなった）書風であり、これらを考慮すれば、書写年代は鎌倉中期から下っても後期の初め頃と推定される。全体にシャープで、さして世尊寺流の特徴を感じさせない書風であり、応永十四（1407）年に没した世尊寺流第十四代の行俊を筆者に充てることには疑問が残る（この点、建長七（1255）年当時の生存が確認される覚源の方が無理がない）。当然、各種名葉集類の「行俊」条にも該当する記載は見出せない。一方、『増補新撰古筆名葉集（安政五年版）』の「覚源法印」条には、「同（四半）續古今異本哥二行書」という記述があり、おそらくこれが該当するものと思われる（同条には、「同（四半）續後撰異本歟哥二行書」という記述も見えるが、続後撰集入集歌の撰入という点では、雲葉集は該当しない）。名葉集に記載されるだけあってツレは比較的豊富で、『古筆学大成』第十六巻に六葉、『私撰集断簡集成』に四葉、『霜のふり葉』に二葉、『平成新修古筆資料集』第三集に一葉、『続古筆の楽しみ』に一葉（私撰集断簡集成所収切）、『古筆資料の発掘と研究残簡集録 散りぬるを』に一葉（極札「二條為定卿」）の他、加藤正治氏

旧蔵で現在は大坂青山短期大学に蔵される卷子装に改装された巻第四・夏の八葉四十四首分などが確認される（この他、古書目録類にも確認されるが、比較的近年のものなので、所有者の便宜を慮り省略する）。

完本が存せず（巻第一～巻第十前半と巻第十五の一部が残存）、上記の青山短期大学蔵本と冷泉家時雨亭文庫蔵の残欠本（巻第七巻末～巻第十巻頭）以外には古写本に恵まれているとは言えない『雲葉集』にとって、古筆切の存在は貴重であり、伝後京極良経筆四半切・伝藤原為家筆雲紙本雲葉和歌集切・伝藤原為氏筆四半切と並び鎌倉期の断簡である伝覚源法印切が、その伝本の研究に資することは言を俟たない。中でも伝覚源筆切は最も数量に恵まれており、今後の新資料の発見の可能性も高いものと思われる。

本切の書写内容は、『雲葉和歌集』巻第十・羈旅の九五～九五三番歌で、ミセケチによる訂正箇所を除いて、新編国歌大観所収本文との異同はない。

よみ人しらす

神さふるいはねこりしくみよしのゝ

みつわけ山をみれはかなしも

後京極摂政家十首哥合に秋旅

寂蓮法師

あふさかをこえたにはてぬあきかせに

すゑこそおもへしらかはのせき

五十首哥の中に

平政村朝臣

みやこいてゝけふこえそむるあふさかの
せきやたひねのはしめなるらん

4、伝小倉実名筆四半切（藤葉和歌集）

未装の断簡で、極札（斐紙・青雲紙に金泥花鳥絵、一一・九×二・二cm）には「小倉殿実名卿〔琴山（墨印）〕」とあり、裏面に裏印等はないが、鉛筆書きで「わすられぬ」と記されている（これも札表に筆者名しか記されていないので、所有者の忘備のための処置であろう）。筆跡と表に筆者名のみを記す形式や琴山印に欠画が殆ど見られない点からは、古筆本家二代了米の初期の極めかとも思われるが、偽札の可能性も捨て切れない（稿者の手元には、同様の極札を付した切が他にも存しており、それらも含めた疑念である）。

料紙は斐楮交漉紙、二一・六×一三・六cm（字高一九・五cm）で、右辺中央下に文字の残画が僅かに残されており、一行分が切り取られていることが推測される（ツレに比較すると、下辺も一cm程度切断されているようである）。元は四半形の冊子本と推定される。和歌二行書で、通常は一面七行。書写年代は南北朝中期頃で、実名の真筆である冷泉家時雨亭文庫蔵の『永徳百首』等と比較すると明らかに別筆であるが、応永十一（1404）年、九十歳で没した実名の名を充てゝも不自然ではない（書写内容を知っていて充てたとすれば、寧ろ卓見であろう）。文字は大振りで南北朝期らしい伸びやかさに充ちており、行間をたっぷりと取った書写態度は、本切が浄書本に類する写本であった可能性を考えさせる。名葉集類の「実名」条には、本切に該当する記載は認められない。

本切のツレは、『藤葉和歌集』を書写内容とする伝小倉実名筆四半切として知られており、『古筆学大成』第十六卷

に二葉（凶版・個人蔵古筆手鑑・卷第六恋歌下・五五三下³⁴²句〜五五五上句、凶版³⁴⁹・名家古筆手鑑集・古筆手鑑（4）・卷第五恋歌上・四七八歌〜四八〇詞書）、『私撰集断簡集成』に一葉（古筆学大成第十六卷凶版³⁴⁹に同じ）、白鶴美術館蔵『手鑑』に一葉（卷第六恋歌下・五六〇〜五六一）、宮内庁書陵部蔵『手鑑』に一葉（散佚部分）、『古筆切の国文学的研究』に一葉（卷第四冬歌・二七〇歌〜二七二詞書）、『平成新修古筆資料集』第四集（散佚部分）、『古筆の楽しみ』に一葉（散佚部分）、『続古筆の楽しみ』に一葉（卷第一春歌・一五作者〜一七作者）、『古筆への誘い』に二葉（卷第六恋歌下・五三八下句〜五四〇作者、卷第六恋歌下・六三〇作者〜六三二）などが報告されている。

『藤葉和歌集』は、小倉実教が撰した私撰集で、康永三¹³²⁴年〜翌八月の成立（伝称筆者である実名は実教の孫に当たり、実教二男である父富小路公脩の死後、実教の猶子となった）。現存伝本はいずれも残欠本で、卷第一春歌〜卷第六恋歌下のみを有するに過ぎず、本来は雑春・雑秋・雑上下といった巻がこれに続き、全十巻と推測されている。

本切の書写内容は『藤葉和歌集』卷第六・恋歌下（六三二歌〜六三三）で、巻末に当たる箇所であり、切り取られた一行を隔て、『古筆への誘い』所収の兼築信行氏所蔵切に接続する。右辺の残画はおそらく六三三作者「藤原雅朝朝臣」の「藤」の「月」の第一画の端に当たるのであろう（鑑賞のための切断であろうが、詞書などはないので、この切断の意味は分かりにくい↓おそらく切断部分は破棄されたものと思われるが、詞書と作者名だけの一行分の切なども存するので、出て来る可能性も皆無ではない）。左辺の一行分の空白は巻末故のものである。既存部分の切とは言え、古写本に恵まれない『藤葉集』にとって、成立時期に近接する書写年代を持つ伝小倉実名筆四半切の持つ資料的な重みは言うまでもない。新編国歌大観所収本文との異同は認められない。

わすられぬ我心にそのこりけり

ともに見し夜の有明の月

正二位隆教

うきなからまちし物をとしのはれて

いつはりまでそ月にこひしき

5、伝三条実任筆四半切（歌枕名寄）

未装の断簡で、極札（一四・二×二・一cm）には、

〔表〕「三條家實任卿おほかたは〔琴山（墨印）〕」

〔裏〕「切〔朱割印〕 丙戌五〔了音（墨印）〕」

とあり、古筆本家六代目了音が宝永三1706年五月に極めたものと知られる。

料紙は楮紙（図版⑥裏面に見られるように墨の滲みⅡ裏移りが認められる）、二一・八×一〇・一cm（字高は五行目下と六行目上を採って、一八・五cm）。和歌二行書、一面七行であるが、後述するように本切は静嘉堂文庫蔵『詞枕名寄』から切り取られた一葉であり、本来は一面九く十行であったと考えられるので、横幅が三分の一強切断されているようであり、縦寸も下部が二cm程度切られていると考えられる。元は四半形の冊子本。切裏中央下には「十」と墨書されており、元は手鑑の表帖の十番目に貼られていたことが知られる（精華家に属する三条家は表帖に配されるのが通例）。

本切の筆者とされる三条実任については、近年、冷泉家時雨亭叢書に『文保百首』⁽²⁶⁾『正中二年七夕御会和歌懷紙』⁽²⁷⁾『元徳二年七夕御会和歌懷紙』⁽²⁸⁾といった自筆資料が収録されたことによって、その比較が容易になった。これを受けて、

同じ実任を筆者とする淡路切古今集については、「似通う点はあるものの、同筆とは断定しがたい」とする意見がある一方で、「まさ(30)に両者同筆の趣が見て取れる。おそらく実任の署名入り奥書を備えた本などを切ったのであろう」とも述べられている。

本切と淡路切は同筆であり、後掲のツレを含めて検討すると、特に『文保百首』とは、字形や仮名の書き癖、文字のスケール感、運筆の呼吸なども共通しており（仮名の使用字母については、ともに特徴的な傾向Ⅱ好みは見出せない）、ほゞ同筆と見てよい（まさ(30)に「同筆の趣」と思われるが、個々の文字については、『文保百首』では「人」の二画目の終筆を大きく右横に伸ばしており、淡路切や静嘉堂文庫蔵『調枕名寄』ではそのまゝ斜め下に流しているといった違いも認められる。二種の懐紙については書写態度そのものが違っており、比較対象としては適切とはいえないが、筆致そのものには通うものがある。これらの共通点と差異をどのように評価するかにもよるが、以下にも述べるように、古筆鑑定家が歌人や能書としてさほど高名とはいえないがたい三条実任を筆者に充てるには、それ相応の理由が存したものと思われる（本切のツレに国夏・為貫・兼好といった異伝が生じているのも、古筆切筆者としての実任の存在の不安定さの反映であろう）。今のところ、真筆の可能性を考慮すべきものとしておきたい。

本切の書写年代そのものは、その書風の近似性などを考慮すれば、実任の『文保百首』詠進時期に近い頃と見てよさそうであり、鎌倉後々末期としてよいであろう。実任の『文保百首』詠進はその位置により文保二・1318年の春以降と考えられ、当時五十五歳の筆は老筆とまでは行かないが、連綿の続き具合などから見ても本切の方がやゝ流麗であり、もし同筆であれば、少しく若書きであるとも思われる（都合良く見れば、先の「人」字の書き様の違いなども、やゝ老筆的な固さの顕れと理解することもできるかも知れない）。

ツレとおぼしき切が二葉報告されている（田中登氏蔵及び大坂某家蔵の伝津守国夏筆四半切）(31)が未見であり、他に

徳川美術館蔵手鑑『玉海』⁽³²⁾（伝為貫筆四半切・二代畠山牛庵極）『藁叢』⁽³³⁾（伝兼好筆四半切・分家二代了任極）、五島美術館『毫戟』（未見）、『古筆への誘い』⁽³⁴⁾所収伝為貫筆四半切（裏書）、『はじめての古筆切』⁽³⁵⁾所収伝二条為貫筆四半切（極札等不明）などがツレとして報告されている。これらを通覧すると、現状では伝称筆者を「三条実任」とする方が稀である、というよりかなりの揺れがあることが見て取れる。名葉集類の「実任」「国夏」「為貫」「兼好」条のいずれにも、本切に該当する記載は認められない。

本切の書写内容は、『歌枕名寄』巻第十一の末尾部分（新編国歌大観所収本文では三三五〇・三三五二番）に該当するが、本文は増補本（流布本）系統ではなく非流布本系統に属するものである。本切は、静嘉堂文庫蔵『詞枕名寄』と同筆であり、書式等を勘案すれば同本から切り取られた一葉であると考えられる。同本は、青木信寅氏旧蔵の「二四・〇×一六・三糰の列帖本」で、和歌二行書、一面九〜十行で記されており、前述したように本切は少しく切断されていることが分かる。

⁽³⁷⁾同本の巻第十一「畿内部十一大和國六」の目録（目次）末尾には、

柏木社 龍市 建保名所在之／用辰字

并間清水 海原榴市 歸市

弓弦葉御井

磯城嶋 磯城嶋大和者惣名也然而又先／達哥枕当國名所立也

詞

とあるが、卷第十一の本文は、

海石榴市

^{万十}つはいちのやそのちまたにたちならし

むすへるひもとかまくもおし」三八ウ

と、「海石榴市」を詠んだ一五八一番（新編国歌大観では三三三五番）で終わっており、この後ろには明らかに落丁が存することが予想される。本切の「額田王反哥」は「弓弦葉御井」を詠んだ歌（三三四九）の反歌として置かれており、その前の「歸市」題は流布本系統でも三三三七番の一首（六百番歌合季経歌）のみなので、この箇所³⁸の落丁は本切分の一丁にとゞまるものと推定される（おそらく本切の右辺に三行程度の切り取りがあり、これを「弓弦葉御井」題とその和歌一首に充当すればよいものと考ええる）。

静嘉堂文庫本には『歌枕十六冊三条家黄門実任卿』と記した紙片や三条実任卿筆とした極札もあったというが、現在には出納されない³⁹由である。同本には現状では「奥書・識語の類」はないので、鑑定者は何を根拠に実任の筆としたのであろうか。同じく実任筆の淡路切が古筆本家の鑑定見本台帳でもあった『藻塩草』にも貼られており、そこからの類推と考えることも可能であろうが、静嘉堂文庫本の「現存第一帖（卷二）の終に『已上嵯峨篇畢／一交畢』、同第十四帖（卷一）の終に『已上宇治篇畢』などとある」ことを勘案すれば、巻末に奥書等が付されていた可能性が極めて高そうであり、それを参考にした鑑定であったと考える方が分かり易い。同本には錯簡部分も存しており、相当量の脱落（卷二〜五、九、十一〜十二、三十四、三十六の一六帖のみ残存）も認められるので、改装等による物理的な

改変以外にも様々な流出の可能性が示唆される。おそらく本切と同様に、奥書部分も切り取られたか、落丁或いは破損^{||}破却したのではなからうか。

『歌枕名寄』の「原初形態⁽³⁹⁾の成立は新後撰和歌集の直前」と考えられており、『新後撰和歌集』は正安二1301年十一月二十三日に後宇多上皇の院宣を受けた前権大納言為世が、嘉元元1303年十二月十九日に奏覧本を奉っているので、本切を実任真筆と仮定すると、実任の没年（暦応元1328年十二月三日、七十五歳）を考えても、静嘉堂文庫本の書写時期は同書の成立時期に驥尾を接していると言つてよい。⁽⁴⁰⁾ いずれにしても成立後間もない時期の書写であることは確かであり、その後の増補以前の原初の形態をとらめたものとして貴重であり、一葉ではあつてもこゝに補うことができたことは幸いである。

もし本切が伝称通り実任の筆であつたとすれば、『為兼卿和歌抄』に「実任侍従⁽⁴¹⁾」として登場する若き日の三条実任が、和歌への関心を失わず（寧ろ深めて）後年まで持ち続けていた様を目の当たりに見る思いがして、まことに感慨深いものがある。また同様に、その極めて早い書写時期を勘案すれば、あまり明瞭とは言えない『歌枕名寄』の撰者を、実任やその周辺を含めた大覚寺統の周縁に求めるべきであろうことが示唆されようが、実任真筆という確証が得られない現状では、屋上屋を架す空論に過ぎないことは言うまでもない。今後の精査を俟ちたい。

流布本系統に属する新編国歌大観所収本文とは、歌の有無、注記の内容、書式等に顕著な相違が認められる。

賜額田王哥

額田王反哥

いにしへにこふらむとりは郭公

ましてやなきしわかこふること

磯城嶋 哥雖多為惣名故覽之

おほかたはしきしまのとやいひてまし

こひしきことのやまとなるへし

〈注〉

(1) 料紙に関しては、鎌倉期以降の紙では純粋な斐紙というのは稀であると思われるので、比較的雁皮の含有量が多いと思われるものを「斐紙」、判断が付かない程度のものを「楮楮交漉紙」、明らかに楮質のものを「楮紙」として扱ったが、観察者によって意見が相違する場合も存する(流通的には斐楮交漉紙は「斐紙」であり、当時の利用者の認識も同様であったが、書誌的情報として弁別を図っておいた)。本稿では、デジタル顕微鏡で繊維の状態や文字部分の墨のノリ具合などを観察し、手元にある純粋な斐紙・楮紙各種の画像とも比較して判断を下した。これも畢竟肉眼による確認・判断なので、絶対的なものではないが、従来の経験則による判断よりも少しは客観性があるものと考えた。また、同一写本の一冊・一卷全紙が同一紙質であるという保証もないので、あくまでも手元の一葉についての判断にすぎないことをお断りしておく(尚、古筆切に関しては、紙質や極札・本紙の裏書等は基本的な書誌情報なので、可能な限り言及することを心掛けたが、軸装の書誌に関しては今回は一々の寸法等は省略し、概略を記すにとどめた)。

(2) 字高は、切中の本文で最も高い(上辺に近い)部分と最も低い(下辺に近い)部分を選び、計測した数値を記した。

(3) 以下、切裏に関して記すべき情報のないものについては、一々その旨を注記しない。

(4) 冷泉家時雨亭叢書第七卷『平安中世私撰集』(平成五 1993 年八月、朝日新聞社) 所収(赤瀬信吾解題) 及び第三十四卷『中世百首歌 七夕御会和歌懷紙 中世私撰集』(平成八 1996 年六月、朝日新聞社) 所収(赤瀬信吾解題)。

- (5) 拙稿『現存和歌六帖』の成立に関する諸問題』、『研究と資料』第十八輯、昭和六十二(1987)年十二月) 参照。
- (6) 呉文丙(昭和四十(1965)年六月、理想社〔非賣品、二〇〇部限定〕)。
- (7) 拙稿「六帖題和歌」の周辺(上)——『現存和歌六帖』の原態について——』、『中京国文学』第十三号、平成六(1994)年三月)。
参照。
- (8) 伊井春樹・高田信敬編『古筆切提要—複製手鑑索引—』(昭和五十九(1984)年一月、淡交社) 所収の影印に依る。
- (9) 小松茂美(平成二(1990)年六月、講談社) 図版291〜295・298。
- (10) 久曾神昇編(平成十一(1999)年十一月、汲古書院) 第四十六〜四十九図。
- (11) 徳川黎明會叢書・古筆手鑑篇二『蓬左・霜のふり葉・八雲』(昭和六十一(1986)年二月、思文閣出版) 霜のふり葉・裏一七(図版125)。
- (12) 田中登編(平成十八(2006)年一月、思文閣出版) 九六。
- (13) 田中登編著(平成二十九(2017)年五月、武蔵野書院) 54(日比野浩信解説)。
- (14) 池田和臣(2014年九月、青簡社) 第一章第三節12。
- (15) 『大坂青山短期大学所蔵品図録』第一輯(平成四(1992)年十月、思文閣出版) 197。
- (16) 冷泉家時雨亭叢書第三十四卷『中世百首歌 七夕御会和歌懷紙 中世私撰集』(前掲注4) 所収(赤瀬信吾解題)。
- (17) 前掲注16所収(三村晃功解題)。
- (18) 『名家古筆手鑑集』(昭和四十八(1973)年六月、思文閣) 架蔵本には刊記等が見当たらず、詳しい記載内容を有する注21の記述に抛ったが、注8では「昭和四十六年刊」と記載する(『古筆手鑑(4)』(83))。
- (19) 古筆手鑑大成第二卷『手鑑(白鶴美術館蔵)』(昭和五十九(1984)年五月、角川書店) 150・表三三ウ。
- (20) 古筆手鑑叢刊1『宮内庁書陵部蔵古筆手鑑』(1999)年十月、貴重本刊行会) 四九。
- (21) 田中登(平成九(1997)年九月、風間書房) 第二章第十節第28図。

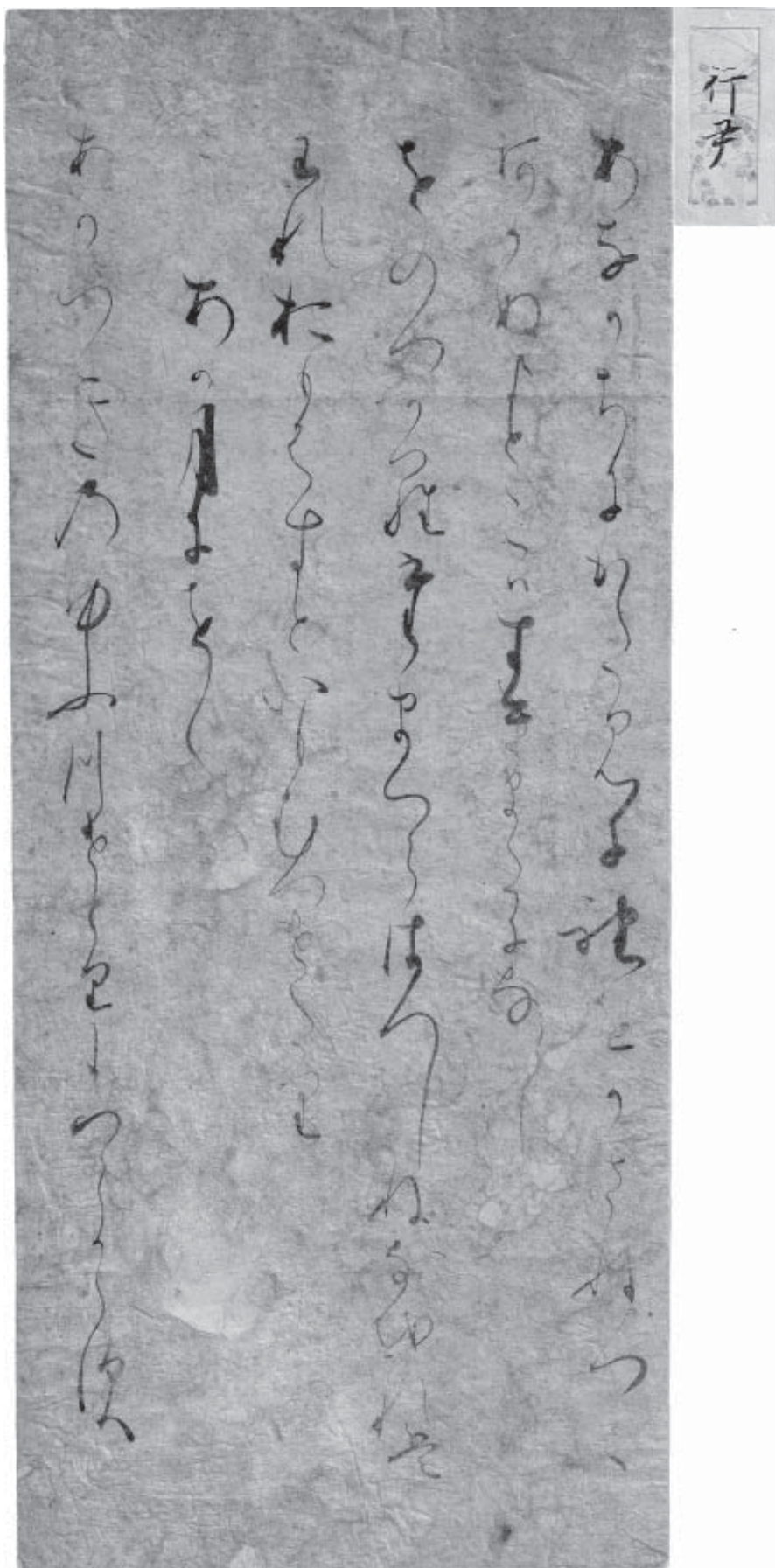
- (22) 田中登編（平成二十二年2008年九月、思文閣出版）二四。
- (23) 田中登編著（2015年二月、武蔵野書院）50（日比野浩信解説）。
- (24) 前掲注13所収・56（日比野浩信解説）。
- (25) 国文学研究資料館編（平成十七年2005年三月、三弥井書店）第一部 13（大垣博蔵・久保木秀夫解説）・14（兼築信行蔵・同解説）。
- (26) 冷泉家時雨亭叢書第三十五卷『大嘗会和歌 文保百首 宝治百首 六条知家』（平成十五年2003年四月、朝日新聞社）所収（三村晃功解説）。
- (27) 前掲注16所収（三村晃功解説）。
- (28) 前掲注16所収（三村晃功解説）。
- (29) 石澤一志・久保木秀夫・佐々木孝浩・中村健太郎編『日本の書と紙―古筆手鑑』かたばみ帖』の世界』（平成二十四年2012年六月、三弥井書店）六一（書誌解説）。
- (30) 田中登編著『平成新修古筆資料集』第四集（前掲注22）二五。
- (31) 福田秀一・杉田重行・千艘秋男編『調枕名寄 下 静嘉堂文庫本』（古典文庫第六〇一冊、平成八年1996年十二月）「解題」（福田秀一）「付記2」。
- (32) 徳川黎明會叢書・古筆手鑑篇一『玉海・尾陽』（平成二年1990年七月、思文閣出版）玉海（上）・裏一七「二条家為貫朝臣」（図版126）。
- (33) 徳川黎明會叢書・古筆手鑑篇三『藁叢・桃江・文車』（昭和六十一年1986年八月、思文閣出版）藁叢（人）・表九「吉田殿兼好法師」（図版20）。
- (34) 前掲注25、第一部20（杉谷寿郎蔵・久保木秀夫解説）。
- (35) 日比野浩信（平成三十一年2019年四月、和泉書院）図版50。

- (36) 前掲注31「解題」参照。以下、同本に関する記述は同「解題」に依る。
- (37) 福田秀一・杉田重行・千艘秋男編『詞枕名寄 上 静嘉堂文庫本』(古典文庫第五九七冊、平成八1996年八月)に依る。
- (38) 古筆手鑑大成第四卷『藻塩草(京都国立博物館蔵)』(昭和六十1988年一月、角川書店) 64・表一六才。
- (39) 『新編国歌大観』第十卷(平成四1992年四月、角川書店) 181「解題(福田秀一執筆)」。
- (40) もし実任真筆ということであれば、後宇多天皇の侍従として大覚寺統治世下で官位をスタートした実任が静嘉堂文庫本『詞枕名寄』のような極めて大部の歌書を書写する余裕があった時期は、嘉元元1301年の任藏人頭右中将以前(もし歌枕名寄の成立がそれ以前に遡るとして)か、徳治三1308年九月十七日(八月十一日とも)の辞参議から文保三1319年四月一日の任左京大夫の間、母の服喪の期間であった嘉暦二1327年六月から翌三年七月までの間のいずれかに限定されるのではなからうか。同じく無官であった光厳・光明両天皇治世下の京都は間近な戦禍と混乱に慌たゞしく、とてものこと長閑に歌書を書写するような環境にはなかったであろうし、実任の高齢を考えてもこれらの時期は除外してよいように思われる。
- (41) 同書では、「又あらぬ句をとりかへ、さまざまの事をつくり出て、披露するたぐひ聞ゆる。実任侍従が哥に『のきのすぢめのすにかよふこゑ』とよみたりけるとかや。これも当時の躰に被賞翫哥とて、『なげしのうへにすぢめすくへり』とかやなして、披露する人あるよし聞ゆ。返々似無其詮歟」(『歌論歌学書集成』第十卷[平成十一1999年五月、三弥井書店]所収本文〔小川剛生校注〕に依る)と、為兼に散々に酷評されている。

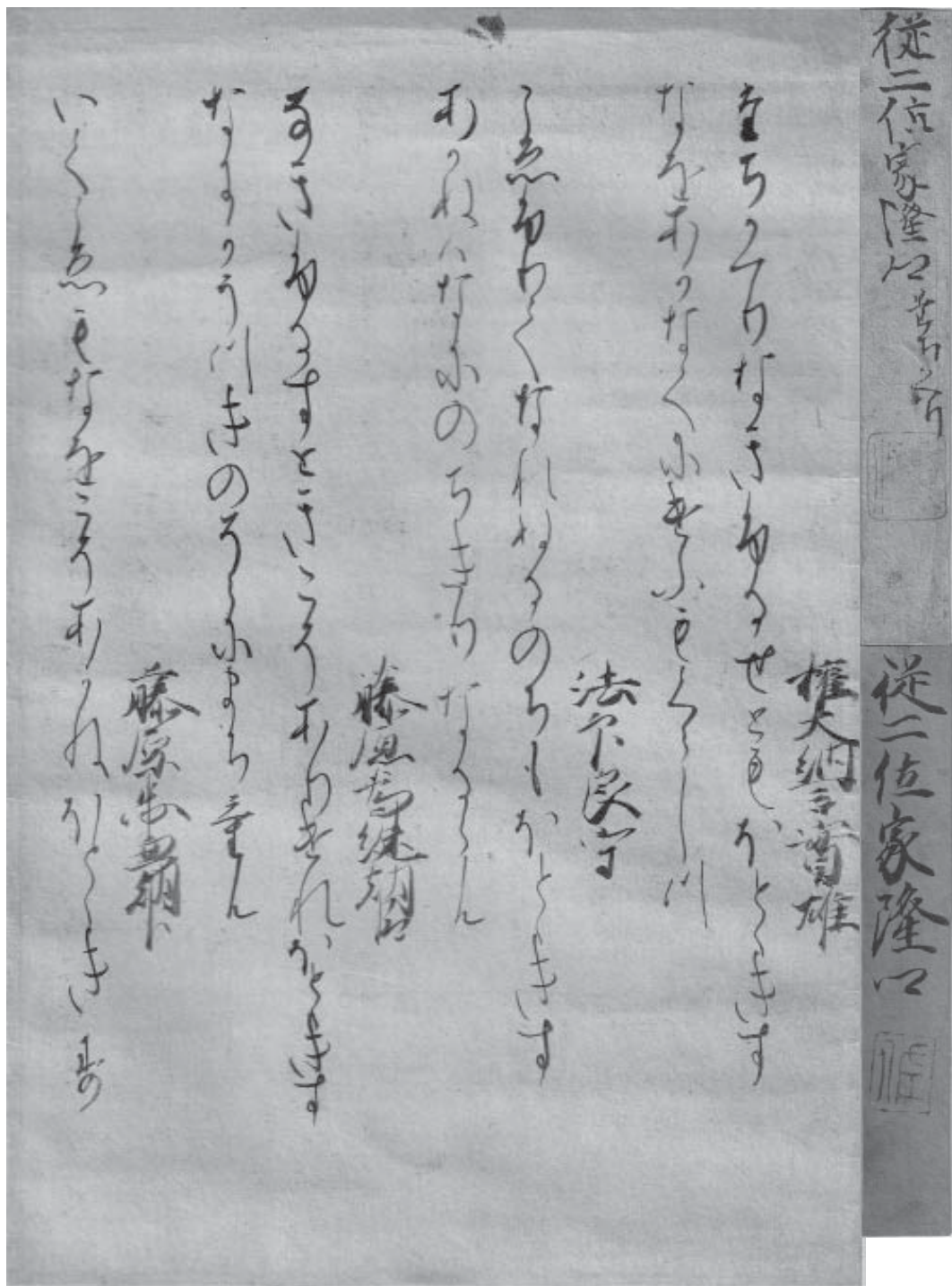
(本学文学部国文学科非常勤講師)

〈図版〉

図版① 伝世尊寺行尹筆四半切（新撰和歌六帖）

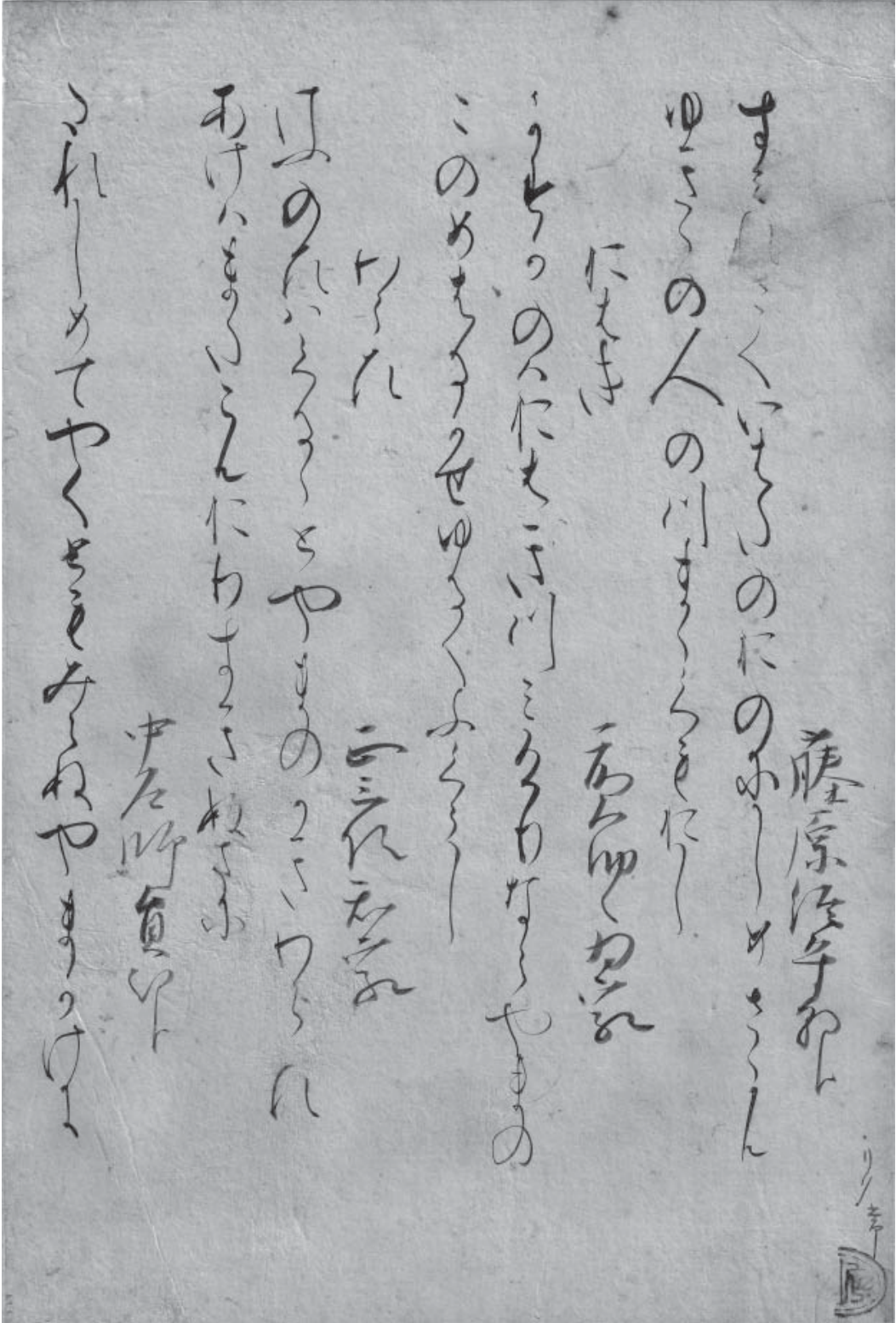


図版② 伝藤原家隆筆四半切（現存和歌六帖）

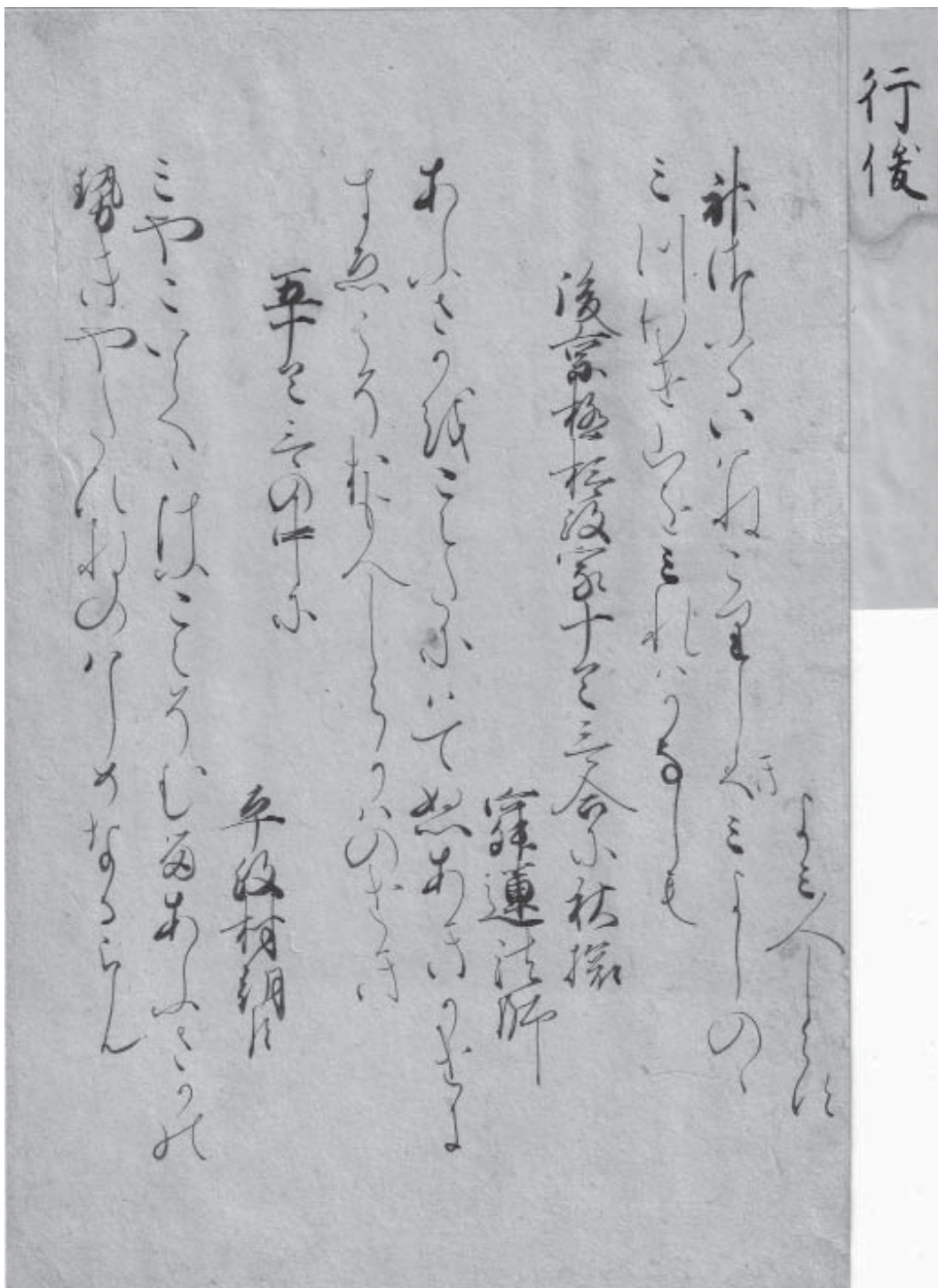


冰青居藏品図録（古筆切編）

図版③ 筆者未詳 四半切 (現存 和歌六帖)

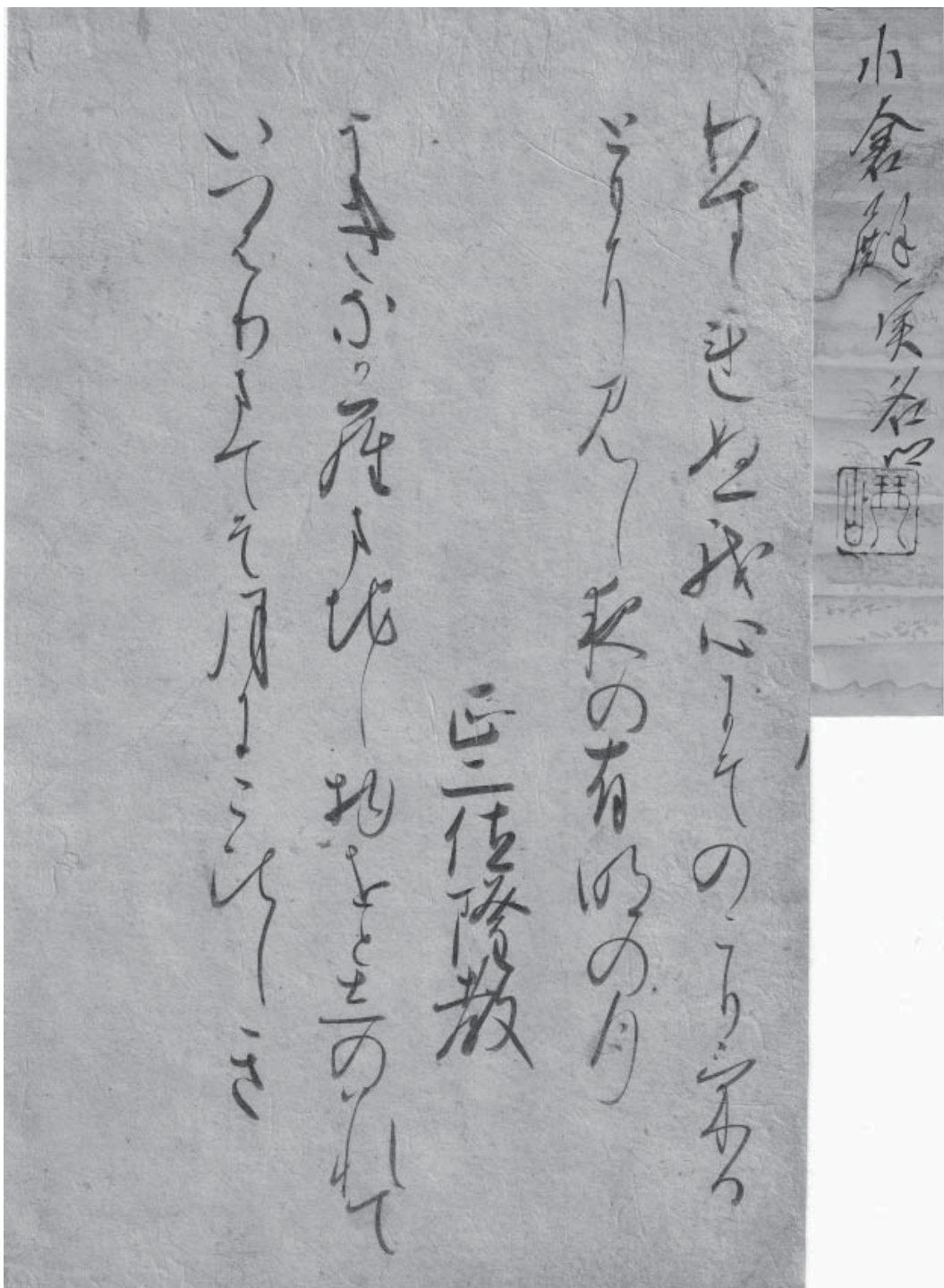


図版④ 伝世尊寺行俊（覚源）筆四半切（雲葉和歌集）



冰青居藏品図録（古筆切編）

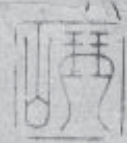
図版⑤ 伝小倉実名筆四半切（藤葉和歌集）



図版⑥ 伝三条実任筆四半切（歌枕名寄）

三條家實任卿

一



賜額田王三

額田王及三

ワシノホコリノ心ヲハシテ

ナシヤカキシテハコト

磯城嶋

三ノ所ヲ為ル名取也

ナリシハ志未シクハヤク

ニ云シキハコトヤウト

